
古代アメリカ学会会報

第20号



コパン遺跡、「神聖文字の階段」

目次

- ◆大会のアナウンスと発表者募集
- ◆『古代アメリカ』の原稿募集
- ◆会員からの投稿
- ◆新入会員
- ◆役員選挙報告
- ◆事務局からのお知らせ

2006年7月

* 本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

大会のアナウンスと発表者募集

2006 年度古代アメリカ学会(総会・研究大会)は、2006 年 12 月 2 日(土) 早稲田大学において開催することに決定いたしました。今年度の研究大会は、昨年同様、研究発表、調査速報、ポスターセッションを予定いたしております。発表時間、内容は、以下の通りです。

- ・研究発表：15 分間。
- ・調査速報：15 分間。2006 年度に行った調査の報告。

・ポスターセッション：研究大会会場の外で A0(841×1189mm)版のポスター1 枚を用いて行う。

発表希望者は、研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれを希望するかを記し、題名と要旨(400 字程度)を事務局まで e-mail、または FAX でお送りください。締め切りは、2006 年 10 月 13 日(金)です。なお当日の発表時間は、発表者数により変更になることがございます。ご了承ください。

会員からの投稿

コパン遺跡出土の動物遺体

浪形 早季子(国立歴史民俗博物館科研費
支援技術者)

2004 年の 8 月から約 2 ヶ月と 2005 年の 3 月の約 1 ヶ月間、ホンジュラス国立人類学歴史学研究所の中村誠一氏のコパン考古学プロジェクト(PROARCO)発掘調査に参加させていただき、出土動物遺体の同定を行った。

コパン遺跡はグアテマラとの国境に近い山あいのコパン谷に位置し、遺跡周辺の標高は約 600 メートル、海から遠い内陸部に位置している。今プロジェクトにおける発掘区域はコパン遺跡中心グループの北、約 150m のところに位置する「ヌニェス・チンチージャ」といわれるところに行われている。これらの建築群は 1969 年に当時のホンジュラス国立人類学歴史学研究所の所長ヘス・ヌニェス・チンチージャ博士によって、建造物の最終段階を露出する平面発掘が行われ、彼の名にちなんでこの名がつけられてるが、その後 30 年以上も放置されていたところである。動物遺体はゴミ捨て場や住居址、特殊遺構、墓などから出土した。同定作業を行うにあたっては、私が現地で収集した現生動物の骨格標本と、以前に同遺跡で調査していたハーバード大学のリサ・コリンズ氏の標本を借用して同定に用いた。

同定破片数は 1963 点であり、資料の採集方法は篩別採集と発掘中の手によるピックアップであった。出土動物遺体の中では哺乳類が 80%を占めた。哺乳類はヨツメオポッサム、サル、ウサギ、パカ、中央アメリカアグーチ、イヌ科、ネコ属、ウマ(混入?)、ベアードバク、クビワペッカー、ペッカー科、オジロジカ、マザマジカ属が出土したが、その大半をシカであった。

シカはオジロジカとマザマジカ属の 2 種類が確認さ

れた。オジロジカ(*Odocoileus virginianus*)は体長 85~205 cm のカナダ南部からペルーにかけて分布している種であり、名前のとおり尾が白い。現地ではベナードまたはベナード・コロ・ブランコといわれている。大きき的には日本ジカと同じくらいを想像して欲しい。一方、マザマジカ属は体長 95 cm~135 cm と小型のシカであるマザマジカ属である。現地ではティロポと言われるようだが、これはホンジュラスの動物学者が言っており、現地の人々はオジロジカと同じベナードと言っているようである。遺跡から出土した動物骨の大半は前者のオジロジカであった。シカは数年前までは遺跡公園内でも頻繁に目撃されたようだ。現地スタッフに今でも見ると言われ、朝 5 時くらいから探しに行ったが見られなかった。やはり近年ではなかなか遺跡周辺や町中で見ることは難しくなっただけで、それでもあきらめられなかった私は、隣村のサンタ・リタに飼われているシカを見に行った。食用のために中央アメリカアグーチと一緒に飼われていた。



＜サンタ・リタで飼われていたアグーチの群れ＞

©浪形早季子



＜中央アメリカアグーチの左下顎骨＞ ©浪形早季子

このアグーチも遺跡から頻繁に出土した。アグーチは体長 40～50 cm の齧歯類で、現在でも現地の人に食用とされている。現地の人はコトゥーサもしくはグアトゥーサと呼んでいる。このアグーチは私も遺跡内で夕方に目撃することができた。また齧歯類ではパカもよく出土する一種であった。パカは齧歯類の中でも比較的大きく、体長 60～70cm ある。動物骨での特徴は頭蓋骨の表面は網目状になっていることである。パカは現地名をテペスクイントレと言い、彼等はアボガドやマンゴーなどの果実が好物である。そのため彼等の肉はおいしいと現在も現地の人々が好んで食べており、コパンの町でも食用として飼われていた。マヤ地域には多数生息する齧歯類が大いに私を悩ませた。私たち動物考古学を専門とするものにとって、動物遺体の同定の中で欠かせないのが標本の収集だが、短期間での現地での収集はなかなか困難であり、日本ではお目にかからない多くの齧歯目は、標本が限られている中で種を同定するのは非常に困難である。標本収集には研究所のスタッフにずいぶんお世話になった。掃除のおばさんまで清掃中に見つけたネズミの死骸をくれたりと、とてもありがたかった。余談だが、私がアルマジロの標本を作っているときには、普段はまた日本から来た子が大変なことをしている、何してるんだとみんなのぞぎに来るのに、この時ばかりは臭いと寄って近寄ってこなかった。ちなみに別れるときにくれた似顔絵にはアルマジロが描かれていた。

また齧歯類に次いで多く出土したのがペッカリーである。ペッカリーは北アメリカ南部から南アメリカにかけて生息し、その外観はイノシシに似るが全体に小型である。背中に油性の特有のにおいの液を出す腺があり、この腺をへそにみたてて、ヘソイノシシと呼ばれることもある。現地ではチャンチョ・デ・モンテと呼ばれており、現在コパンではみられず、もっと山の方にはいるということでしたが、スペイン人が持ち込むまでウシやウマのいなかったこの地において大型の陸獣はシカとペッカリーですが、シカに比べるとその生息地域や繁殖力など小さく、捕獲される率は低かったようである。

哺乳類はその他、ウサギやイヌ、サル、ネコ、オポッサム、バク、ウマが出土しているが、ウマは表層からの出土で、後からの混入と思われる。

哺乳類以外ではjuteと呼ばれるマイマイ類が326点、カニの指節部（ハサミ）が5点出土している。魚類の出土は今回の調査では見られなかったが、遺跡に隣接して雨季には比較的大きな川となるコパン川が流れているため、今後ブロックサンプルをとるなどの方法によって再検討する必要がある。また鳥類においても四肢骨の破片が4点のみの出土であった。鳥類の出土がほとんど見られなかったことは鳥類が多量に生息するこの地域において疑問であり、征服当時のマヤ人は七面鳥の飼育を行っていたことから更なる検討が必要である。

今調査では49点の骨製品もしくは製作途中の加工品が出土しており、うち30点がシカで、1点がイヌ科の犬歯に穿孔したもの、18点は種の同定まで至らなかったが陸獣の四肢骨を使用している。オジロジカの脛骨（すねの骨）は遠位部（下の方）で切断されたものが出土したが、これはコパン遺跡の建造物 10L-11 から出土したヤシュ・パサフ王の身支度を女性が手伝っているところが彫刻された工芸品もしくはシカの骨を使用した笛などに使用されたものの廃棄された部分であると考えられる。また、カワガメもしくはヌマガメなどの陸生のカメの甲羅である縁骨板と右中腹板の部分がつながった状態のものも出土した。これは祭礼時などにおいて太鼓などの楽器として使用されたものと考えられる。ホンジュラスではコパンから北東に位置するモスキート地方という地域でカメが頻繁にみられる。コパン遺跡でのカメの出土は1点だけであるが、これはコパン遺跡の立地条件によるものと考えられ、モスキート地方のような低地の湿地帯には比較的大きな陸生のカメが生息し、おそらくマヤ都市が多く点在するグアテマラの低地においてはカメの利用頻度は高かったと思われる。カメは食用としてだけでなく儀礼などにおける骨の利用があるが、儀

礼用の動物としてはその他に七面鳥やイヌ、シカ、ペッカーリーなどが挙げられ、今回同定した動物遺体は特殊遺構や墓からの出土がみられ、そこから出土したシカなども食料としてだけでなく、生贄としても利用されていたと思われる。

今回、コパン遺跡の動物遺体に携わる機会に恵まれたが、もともと日本の動物考古学を専攻していた私にとって、この地域はまだまだ始めたばかりで、手探りの状態である。今後はますます更なる標本の収集と共にマヤ地域の動物遺体の比較からコパン遺跡の特異性を見出していきたい。

ペルー海岸部マウンド遺跡における遺物採集 —ワカ・プルパール遺跡第一次調査にて—

広田 健 (広島大学大学院文学研究科博士課程)

発掘調査の際、調査者が最も注意を払わなくてはならないことのひとつは、遺物採集である。考古学者のためのサンプリング理論に関する概説書はいくつかあるが、調査目的や土の状態などの条件によって、実際に用いられる方法は様々である。本投稿では、2005年10月から12月にかけて、ペルー共和国ラ・リベルタ県アスコペ郡ラスリーのワカ・プルパール遺跡で実施した発掘調査の際に用いた遺物採集方法について書き留めることにする。

本遺跡はチカマ川河口の北約15km、海岸線に至近の微高地上に立地し、マウンドを中心として約2haの広がりをもっている。マウンドは2段構えで、南北150m、東西80m、高さ10mの楕円形マウンドの頂上平坦部南半に、直径50m、高さ3mの円形マウンドを頂き、前方後円墳のような形状を呈している。先行研究によると、南に約10km離れたワカ・プリエタ遺跡と同時期の先土器時代末の遺跡とされているが、発掘調査では上部マウンドから土器の出土があった。調査の主目的は生業関連遺物の層位データの収集であり、主にマウンド部分の発掘調査を行った。

さて、遺物採集方法だが、現場において手で取り上げるほかに現場1、調査室2の計3方法を併用した。現場で用いた方法はシービングで、調査区から出た全廃土をフルイに通した。ペルーでは魚骨の出土が見込まれる場合、1/16インチ(約2mm)のフルイを使用するのが一般的なようだが、1/16インチ単独だと大型の遺物や礫が邪魔になるため微小遺物の取り上げに時間がかかる。そこで1/16インチのフルイの上に1/8インチ(約4mm)

のフルイを重ねて、大型遺物の取り上げと礫の除去を1/8インチで行い、小さな遺物は1/16インチで取り上げることにした。この方法には、フルイごとに分けて遺物の登録をすれば、分析が若干楽になるという利点もある。フルイの網は近くのトルヒーヨ市内の金物屋で1m×0.8mのものを購入し、それに近所の大工に頼んで木枠を取り付けてもらった。大工の都合にもよるが、半日で出来上がり、1台の製作にかかる費用は4,000円ほどである。

調査室での方法の1つは50cm四方に設定した精査区から採取した柱状サンプルを調査室へ持ち帰り、それを0.4mmメッシュのフルイに通す方法である。精査区は4地点で設定した。使用した道具は料理用のザルで、リマ市内で購入した。目合いの小さいザルはトルヒーヨでは売っていないようである。ザルには0.4mmの表示は無いので、近くの金物屋で0.4mmの網のサンプルをもらい、それと比較して0.4mmとした。ところで、今回の調査では様々なフルイを使用した。ペルーには網に関する規格が無いという問題があることに気づいた。工場によって同じサイズ表示でも実際には異なっている可能性もあるため、他の研究者のデータと比較する際に問題が生じるかもしれない。本投稿ではとりえず大まかなサイズと購入地を記しておいた。

調査室での2つめの方法は、フローテーション法による植物遺存体の採集である。これにはプラスチック製のタライと日本の100円ショップで購入した風呂のゴミ取りネットを使用した。ペルーでフローテーション法を行う場合、水の確保が問題になるが、近所の方の好意で水を分けていただいた。現地調査の際に御近所付き合いは重要である。また、調査室での作業後に残った土は、後日遺跡に戻した。

最後にこれらの遺物採集について若干のコメントを記しておく。ただし、現在のところ、採集した遺物の定量分析を行っていないため、以下は筆者の印象による。まず、現場でのシービングだが、タイやサメなど大型の魚類の骨は1/8インチのフルイで全て取り上げ可能で、1/16インチのフルイではほとんど遺物が引っかからなかった。そうかといって、小型の魚類が無いということではない。調査室で行った0.4mmフルイを使用したシービングでは、カタクチイワシのものと思われる椎骨が多数検出されたためである。そうすると現場でも0.4mmフルイを用いて全廃土をシービングすればより良好なデータが得られるのではと思われるが、残念ながら時間がかかりすぎてしまうため現実的ではない。フローテーション法については、植物の種子のようなものが大量に

検出されており、水の確保が可能なら取り入れるべき方法である。現在のところの結論として、海岸部のマウンド遺跡を生業関連遺物の採集を目的として発掘調査を行う場合、現場では 1/8 インチのフルイを用いたシービング、調査室では 0.4mm のフルイを用いたシービング、さらに植物遺存体の出土が見込まれる場合にはフロー

ーション法を組み込んで遺物を採集するのが最適ということになる。あとは、調査室に持ち帰るサンプル選定の問題である。

筆者は 2006 年にも第 2 次調査を実施する予定だが、それと合わせて遺物の定量分析が済んだ段階で、いずれ詳細に報告したい。

役員選挙報告

2006 年 7 月 1 日に、2006 年度役員選挙の開票を実施した。総投票数は 42 票で、選出結果は次の通りである。

- ・会長（有効投票数 42 票） 当選人：大貫良夫
- ・代表幹事（有効投票数 42 票、うち白票 2 票）
当選人：関雄二

- ・監査委員（有効投票数 84 票、うち白票 5 票）

当選人：鶴見英成、坂井正人

古代アメリカ学会選挙管理委員会委員長
森下壽典

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第 9 号（2006 年 12 月発行予定）に掲載する原稿を募集します。

投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから（原稿受領後 1～2 ヶ月で査読終了予定）順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛（下記佐藤宛）にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

尚、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

*投稿に関する連絡先：

佐藤悦夫

〒930-1292

富山市東黒牧 65-1 富山国際大学国際教養学部

Tel : [REDACTED]、Fax : [REDACTED]

E-mail : s[REDACTED]

新入会員

2005 年 12 月 7 日から 2006 年 6 月 20 日までの役員会（メールを含む）で以下の方々の入会が承認されました。会員数は現在 169 名となっております。

- ・ [REDACTED]
[REDACTED]

事務局からのお知らせ

1. 会費納入のお願い

2005 年度までの会費が未納となっている方は、同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2. 会報への投稿募集

『会報』第 21 号への原稿を募集します。現地調査や博

物館調査での体験やエピソード、各地で行われている研究会や講演会、展示会、出版物の紹介などの情報を、会報委員または研究会事務局までお寄せ下さい。多くの方の投稿をお待ちいたしております。

3. 会員の [REDACTED]さんと [REDACTED]さんが転居先不明となっております。転居先をご存じの方は、事務局(jssaa@sarwx.jp)までお知らせ下さい。

4. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2000円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌

と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

<編集後記>

今回の会報で、長期間つとめさせていただいた会報委員の任期が終了いたします。わたくし自身の努力不足にもかかわらず、投稿を寄せてくださった会員の方々のご協力で、毎回充実した内容の会報が発行できたこと、感謝しております。今回も、浪形早季子さん、広田健さんが貴重な研究・調査の報告を書いてくださいました。お二人と、またご協力くださった中村誠一さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。

2006年7月 徳江佐和子

<表紙写真提供：徳江佐和子>

発行 古代アメリカ学会
発行日 2006年7月25日
編集 徳江佐和子
吉田晃章

古代アメリカ学会事務局
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目1117
東海大学大学院文学研究科文明研究専攻
電話：
Fax：
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180-1-358812
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>